

ほんばこ



愛媛県立今治西高等学校図書委員会 2020

だんだん夏へと近づき暑くなってきています。熱中症などに注意をして過ごしましょう。また、コロナの影響もまだまだ残っているのでそちらにも気を付けましょう。臨時休業中に本をたくさん読んだ人もいますが、朝読書も再開されるので、読書を続けていきましょう。

みなづき かぜまちづき あおいづき
6月(水無月・風待月・葵月)

※二十四節気※

ぼうしゅ
芒種 5日

稲や麦など穂の出る植物の種を蒔く頃です。稲の穂先にある針のような突起を芒のぎといいます。

げし
夏至 21日

一年で最も日が長く、夜が短い日です。これから夏の盛りへと、暑さが日に日に増していきます。

小論文に役立つ本

小論文を書くときの参考にコーナーを設けています。ZESTで利用する人もいます。3年生だけでなく、1・2年生も、普段から興味のあるテーマについて読んでみることをお勧めします。なお、**禁帯出**になっている本は、図書室内での使用になります。協力をお願いします。

◎『現代用語の基礎知識 2020』（自由国民社）

現代社会を読み解くキーワードについて解説されているので、最新の情報・知識を得るのに便利です。ある分野についてまとめた知識を持つのに役立ちます。また、年度版で出されており、事柄によっては過去の版の方が詳しい場合があります。

◎『2020年の論点 100』（文藝春秋）

この年度に問題になった事柄について、分野ごとに識者が論じた文章が掲げられています。断片的な知識を得るのではなく、自分の論を形成するために、また、論文の書き方を学ぶために適しています。

『生物と無生物のあいだ』 福岡伸一 著 講談社現代新書 (2007年5月18日発売)

生命とは、実は流れゆく分子の淀みにすぎない!? 「生命とは何か」という生命科学最大の問いに、いま分子生物学はどう答えるのか。歴史の闇に沈んだ天才科学者たちの思考を紹介しながら、現在形の生命観を探る。ページをめくる手が止まらない極上の科学ミステリー。分子生物学がたどりついた地平を平易に明かし、目に映る景色がガラリと変わる!

この本は十数年前に書かれたもので、私も学生の頃に読んで面白かった記憶があります。内容としては「生物基礎」と「生物」の授業で習うもので、生命とは何かについてDNAの歴史やタンパク質、膜構造についての話を読む意欲がわいてくるように書かれています。教科書に載っていないような人物や研究のやり方のども書かれており、かなり読み応えのある内容となっています。

生命について興味のある人や苦手な人でも読んでみるべき本だと思うので、ぜひ読んでみてください。

(講談社BOOK倶楽部内容紹介を参照した 図書研修課N)

図書館読書会の案内：令和2年7月16日（木）16：40～本校図書館にて

ヘルマン・ヘッセ『マウルブロン神学校生』（新潮文庫『幸福論』所収）で行います。
新潮文庫『車輪の下』の巻末のヘッセの伝記も有益です。本校生徒ならどなたでも参加できます。

薦めてみる本 ヘルマン・ヘッセ『デーミアン エーミール・ジンクレールの青春物語』

Hermann Karl Hesse“DEMIAN Die Geschichte von Emil Sinclairs Jugend”

1 作者：ヘルマン・ヘッセ 1877~1862

1877年ドイツのシュヴァルツヴァルトのカルプ（カルフ）生まれ。父方はバルト系ドイツ人、母方はシュヴァーベン・スイス人の家系。ヘッセは初めカルプのラテン語学校に通うが、1891年以後、マウルブロン修道院のプロテスタントの神学校の寄宿生となり、わずか数ヶ月後にここから逃げ出す。カルプの塔時計工場ペロットのもとでの機械工見習をへて、彼はテュービンゲンとバーゼルで書店員としての職業を習得、自作（詩集散文）を出版。二度イタリアへ旅行し、1904年『ペーター・カーメンツィント（郷愁）』で大成功、マリア・ベルヌリと結婚、ボーデン湖畔に転居。三人の息子たちが生まれる。1911年に東アジア旅行、1912年以後はベルンに住む。1919年には長編小説『デーミアン』出版。彼は家族を伴わずモンタニョーラ（テッスィーン）に移り、最初の結婚は解消され、1923年にはルート・ヴェンガーと結婚。『荒野の狼』は1927年、彼の50歳の誕生日に出版。1931年に彼はニノン・ドルビン（旧姓 アウスレンダー）と三度目の結婚。ヘッセは1924年以来スイス国籍だったが、第二次世界大戦中に、彼の生涯の最終的な決算となる作品『ガラス玉遊戯』（1943年）が出版される。1946年にヘルマン・ヘッセはノーベル文学賞を受賞し、1962年8月9日にモンタニョーラで没。第1次大戦時には敵国への憎しみをいましめ迫害された。（Hermann Hesse Portal というサイトをベースにして手塚富雄『ドイツ文学案内』も参照して書いた。）

2 『デーミアン』（ネタバレあり）

1919年発表。最初はジンクレールという匿名で発表、賛否両論の反響を巻き起こした。フォンターネ賞が贈られ、のち実名を公表し受賞辞退。当時の人々にとって衝撃的な作品だった。

主人公ジンクレールは、デーミアンという不思議な友人に出会う。デーミアンは、年長の不良に虐げられているジンクレールを救い、大人顔負けの特殊な能力を有し、青春に悩むジンクレールの導き手となる。デーミアンと言う、ひたいにカインのしるしのついている人がいる、ジンクレールもその一人だ、我々は仲間だ、と。カインとは旧約聖書に出てくる人類最初の殺人者であり神はカインを追放するが、同時に神はカインを保護するためにカインのしるしを刻印する。デーミアンはアブラクサスの神の名を口にする。それは正統派キリスト教の教義から見れば異端で悪魔崇拝、しかし古代グノーシス派の崇拝した神の名だ。西洋キリスト教文明が行き詰まり崩壊する時新たな世界が誕生する、そのときこそカインのしるしを持つ者の出番だ、新しい時代の理想は、ただ自分自身に到達することだけだ。デーミアンとの交わりの中でジンクレールは学んでいく。西洋文明が行き詰まり崩壊する予感、それは戦争という形でやって来た。デーミアンもジンクレールも兵士となり重傷を負う。そして...

ヘッセはフロイトやユングを学び、ニーチェをも経験している。インド思想に共鳴し、19世紀までの西洋キリスト教思想とは違うものを模索していた。そのヘッセの思想の模索が、この作品ではジンクレールの青春の模索の形で描きこまれていると言える。のちヘッセは『シッダールタ』『知と愛』などを書くことになる。

*ドイツの作家・詩人と言えば、ゲーテ、シラー、グリム、リルケ、トマス＝マン、ヘッセ、カフカ、ブレヒト、エンデらがいる。最近では多和田葉子がドイツ語で小説を書いている。ドイツでは哲学者・社会学者が有名だ。（カント、ヘーゲル、ショーペンハウエル、マルクス、ニーチェ、コーヘン、ヴァンデルバント、マックス＝ウェーバー、ハイデッガー、ヤスパース、ハーバーマス、ルーマンなどなど。）心理学のフロイトもユングもアドラーもドイツ語圏の人だ。音楽家が多数いるのは周知だろう。（図書研修課 Y）